

金城学院大短大 ○東珠実、瀬美美晴、  
名古屋文理短大 鈴木真由子、山女学園大家政 守谷敏子、  
金城学院大 古寺浩、岡大教育 菅原亜子、村尾勇之

目的 本研究の目的は、アメリカ家政学会誌にみる家政学の研究内容が、歴史的にどのように推移してきたかを追求し、家政学の本質を探究するところにある。第1報では、学会誌目次にみる分類項目を時系列的に整序し、第2報では、分析対象論文を特定し、全対象論文の年代別・領域別の属性に基づいてアメリカ家政学の研究内容を概観した。さらに第3報以降、領域別の分析を実施してきたが、本報では「家庭経済領域」に注目し、同領域における研究論文の特徴に基づきながら、その歴史的系譜について明らかにする。

方法 1909年～1989年の JOURNAL OF HOME ECONOMICS(724冊)及び1972年～1989年の HOME ECONOMICS RESEARCH JOURNAL(76冊)における分析対象論文5,765本の中から517本を「家庭経済学領域」の論文として特定し、次のような分析を実施した。①特定された論文を総論、家計、家計調査論、家計管理、消費者問題、物価問題、生活保障、その他の8つの細領域に分類し、各年代における領域構成を明らかにするとともに、年代間の類似性を求めようとした。②各年代における重点領域を中心に個々の論文の内容について分析・考察した。

結果 ①家庭経済領域の全論文を細領域に分類すると、総論の占める割合が3割強でもっとも高く、次いで消費者問題、家計、家計管理の順であった。②年代別・細領域構成の特徴についてみると、1910年代、1950年代には主として総論と家計に重点がおかれているのに対し、1920年代～1940年代、1980年代、1970年代には、総論と消費者教育の論文の占める割合が多くあらわれた。③各年代における代表的な論文によって、家庭経済学領域の研究内容について、時系列的な特徴をとらえることができた。